

「若狭の自然の中で＜不登校児童生徒支援事業＞～東海市との連携～」

1. 参加者

募集人数	応募者数	参加決定数	参加者数
—	—	21	21（愛知県東海市）

2. 事業内容（概要）

◆ねらい

- ・課題を抱える児童・生徒が、若狭湾の雄大な自然の中で心身をリフレッシュするとともに、参加者同士や参加者とボランティアの交流を図り、チャレンジしようとする意欲を高める。
- ・課題を抱える児童・生徒が自然体験活動を通して、より良い効果を得られるようなプログラム開発を行い、近隣青少年教育施設・教育委員会・学校等にプログラムの提供及び発信をしていく。

◆期日・期間

2012年9月15日（土）～ 2012年9月17日（月） 2泊3日

◆連携機関

東海市教育委員会（適応指導教室：ほっと東海「横須賀教室」「上野教室」）

◆参加者分析

- ・東海市適応指導教室（ほっと東海）に参加している児童・生徒および適応指導教室（ほっと東海）スタッフの計45名が参加。
- ・児童・生徒は所属教室ごとのまとまりが2教室あるが、東海市内の小中学校で保健室登校をしている児童・生徒の参加を含め、全体が顔を合わせるのは今回が初めてであり、実質的に別個の3グループからなる。

◆企画のポイント

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
九月十五日（土）			東海市 出発		はじまりのつどい	昼食		施設見学等 アイスブレイキン	・浜辺を歩く① ・浜遊び ・浜をながめる (海とふれあう)		自由時間 夕食		ゆったりタイム ・夕日を眺める① ・選択内容最終決定	入浴 ・ボランティアたち との語り①		就寝
九月十六日（日）	朝のつどい 朝食 清掃			選択活動① (海に親しむ) ・シーカヤック ・磯観察・磯釣り	・浜辺を歩く② ・グラスボート	昼食		選択活動② (海を感じる) ・カッター活動	・浜辺を歩く③	・夕日を眺める②	自由時間 夕食		ゆったりタイム ・手紙を書こう	入浴 ・ボランティアたち との語り②		就寝
九月十七日（月）	朝のつどい 朝食 清掃			選択活動③ (海とともに) ・セルフプラン ・スノーケリング	等	昼食		世久見到着 自然の家 船出 おわりのつどい		東海市 着						

- ・ 予めパッケージされたプログラムを消化するのではなく、参加者個人が興味・関心を元に「自分で決めた」内容に取り組むことで自己決定能力、責任能力を育むことを目的に、選択プログラムを中心に日程構成を行った。
- ・ 参加者の普段の生活で海との関わりが薄いことより、臨海型施設の特徴を最大限に活かし海のプログラムを中心とした活動を実施した。

◆運営のポイント

- ・ 日常生活で基本的な生活習慣を確固に確立していない子どもが見られることから、集団生活における基本姿勢は重視しつつも、ゆとりのある内容展開を持って参加者各人の負担が過大にならないように配慮した。
- ・ 施設到着後より海を感じることでできるスロー系のプログラムからスタートさせ、段階をおってアクティブなプログラムへと移行し、児童・生徒の体力的・心理的なペース配分を考慮したプログラム構成とした。

◆安全管理のポイント

- ・ 当所での活動に精通した登録ボランティアをグループの要所に配置し、安心して活動できる配慮を行った。
- ・ 水辺活動については余裕を持ったスタッフ配置と入念な事前指導を行った。
- ・ 時間にゆとりをもってプログラムを立て、参加者達の準備をしっかりと取ることにより、安心して活動に参加できるように配慮した。

3. アンケート結果

(1) アンケート

<参加者>

項目	4	3	2	1
事業全体をとおしてどうでしたか	74%	26%	0%	0%
この事業のプログラムはどうでしたか	76%	19%	5%	0%
この事業の運営はどうでしたか	57%	38%	5%	0%

4 満足 3 やや満足 2 やや不満 1 不満

(2) 参加者の声

- ・ 少し話ができるようになった。来年もがんばりたい。
- ・ ほっと（適応教室）では、見られない表情が見られた。
- ・ 前より体調がよくなった。
- ・ みんな優しい人だった。
- ・ 生活時間を守る大切だと思った。

4. 成果と課題

(1) 成果

- ・ 事業実施に当たり、3回の事前打ち合わせを行ったことで、東海市側の意向を十分に考慮しながら、プログラム構成を行うことができた。また、その打ち合わせにより、本施設との意識の共有を図ることができた。
- ・ 事前に、2つの適応指導教室に通級している参加者たちと、学生ボランティア数名との交流会を開催したことで、参加者の精神的ストレスを和らげ、スムーズに当日の活動がスタートできることができた。
- ・ 経験値により、関わり方に戸惑うボランティアもいたが、日々の振り返りで関わり方を考え、参加者とのほどよい距離間を保ち、ゆったり生活をともにすることができていた。

(2) 課題

- ・ 参加者の実態が年度によって異なるため、交流会、当日、その後とそれぞれに東海市からのねらいにそった評価の視点や活動を組み立てる必要がある。

- ・ボランティアの関わりが重要である。そのため、事前の交流会から、程良い距離感を保った関わり方を探る必要がある。

5. 活動の様子

